

二人の中村医師

オリンピックの興奮が冷めやらぬ間に、パラリンピックの報道が毎日続いています（この原稿を書き始めたのは、9月1日）。そのせいか、高校野球やMLBの影が薄くなっていたようにも思えます。1964年の東京オリンピックの際のパラリンピックの記憶が定かではないのですが、どの競技を見ても驚くばかりで、人間の可能性を再認識させられるとともに、選手や関係者の皆様のご苦勞が想像されて胸が熱くなることがしばしばで、同じ競技種目でも、オリンピックとは異なる競技を見ているような錯覚に陥ります。

世界で、“パラリンピックの父”と呼ばれているのは、ルードビッヒ・グッドマン（Ludwig Guttman）博士（ドイツ生まれの英国人 1899年7月3日～1980年3月18日）であることはよく知られていますが、同博士の下で学ばれた中村裕博士（1927年3月30日～1984年7月23日）は、日本における“パラリンピックの父”と呼ばれており、1964年の東京オリンピックでは、選手団長をされたと知りました。のちに、著名な作家や大手企業の援助のもと、身障者には「保護より働く機会を」をスローガンに、大分県別府市に「社会福祉法人 太陽の家」を設立されました。この辺の経緯は、NHKドラマ「太陽を愛した人々」（主演・向井理）に描かれています。ビートルズ世代の筆者には、同じ時代に生涯をささげ社会貢献をされた博士のことを“そういわれ見ると・・・”という程度の記憶ですが、今の若い方々は、ビートルズを知っていても中村裕博士のことはきっとご存知ないでしょう。この機会にぜひ知っておいていただきたいものと思います。

もうひとりの中村医師は、中村 哲博士（1964～2019）です。同医師のことを知らない方はおられないと想像します。今、筆者の手元に、中村哲著「天、共にあり」（NHK出版、2013）という本があります。ここには、幼いころは昆虫学に憧れていた筆者が医学部へいき、医者になったのに、なぜ、アフガニスタンという未知の国の井戸を掘る土木技術者になったのかがわかりやすく書かれています。共感する部分が多くありますのは、“医師、井戸を掘る”ということだけでなく、アフガンで井戸を掘ることに至った思いに共鳴するからでした。クリスチャンである博士の“困っている人を命がけで助ける”という高邁な精神には、ただただ、敬意を表する以外に言葉が見つかりません。読み進めば進むほど、博士の見識には、驚嘆するばかりですが、土木技術の原点はここにある、という思いにもかられます。アフガニスタンの人々に敬意を以って迎えられていた博士ですが、最近の政権交代で、アフガンに造られた博士の肖壁画が塗り潰されたというニュースに接して悲しい思いに駆られている方も少なくないでしょう。

2001年9月11日の、世界を不安定に陥れる引き金になったアメリカにおける“同時多発テロ事件”は、まさしく、国際的テロリズムの発端の時、さらに言えば、“世界が変わった日”ではないでしょうか。皮肉なことに、9.11は、筆者の誕生日でもあります。この日になるた

びに、筆者の胸はつぶれるばかりですが、アフガンの現状と中村医師の思いを考えますと、もはや言葉を失うばかりです。

ことの結末は、両中村博士で異なりますが、両博士に共通する、困っている人のために何ができるのか？という想いを、今年も迎えた誕生日を機会に、もう一度原点に据えたいと思うのです。

【付記】

例によって、すこし横道にそれますが、アフガニスタンについては思い出すことがあります。1979年アメリカのイリノイ大学アバナー・シャンペーン (University of Illinois at Urbana-Champaign) 校に留学した時のことです。大学での研究生活が始まって間もないころに、受け入れ教授のメスリ教授 (Professor Reza Mesri) と一緒にイリノイ州の隣のインディアナ州にあるパデュー大学 (Purdue University) のレナーズ教授 (Professor Gerald A. Leonards) を訪問しました。大学の教員専用のレストランで食事をしたときにレナーズ教授の前に座られました。会話の途中、質問を受けたのですが、緊張のあまり、聞かれたことを十分理解できないまま、"yes" と答えた途端、一緒にいた皆さんからどっと笑いが巻き起こりました。あとで分かったことですが、その時のレナーズ教授の質問は、“ソビエトがアフガニスタンに侵入してきたので、日本も危ないと思ってアメリカに逃げて来たのか？”という教授独特のジョークだったと聞きました。1979年当時、アフガンに軍事侵攻した旧・ソビエト連邦 (現・ロシア) に対して国際的な非難が集中していたという国際的な背景がありました。この時の教訓は、“聞き取れない”あるいは“わからない”ときには、やたらと、“yes”と言ってはならない、ということで、長く教訓にしています。

レナーズ教授は地盤工学分野では大変著名な方 (1962年に McGraw-Hill から出版された古典的名著 Foundation Engineering の編者) であることに加えて、土質力学の始祖である、カール・テルツァーギ教授 (Professor Karl von Terzaghi) の名前を冠したアメリカ土木学会の Terzaghi Lecture の第16回 (1980年) 目の講演者でした。講演のタイトルは、Investigation of Failures ((地盤の) 崩壊の調査) です。パデュー大学では、2003年以来、彼の名を冠した"Leonards Lecture"を毎年開いています。不思議なことに、1979年に初めてパデュー大学を訪問して以来、レナーズ教授からは何かにつけ声をかけて戴きご指導いただきました。如才ない人柄で、尊敬すべき先人のおひとりでしたが、残念ながら、1997年、大学の同僚とテニスの途中、急逝されたという連絡を受けました。今の筆者の年齢よりは若い年齢でのご逝去でした。

“厄介な 病の中の バースデイ
嬉しくもあり 嬉しくもなし“

(令和3年9月18日 代表理事 安原一哉)